

## 近現代における「幸せ」の意味・用法の変化と「幸福」との相互関係

ほしかわむつみ  
星川 睦 (明治大学大学院生)

## 1. はじめに

本発表は、近代から現代にかけて生じた「幸せ」の意味・用法の変化を、「幸福」との相互関係から考察することを目的とする。

古来、「幸せ」は、動詞「為合わす」から名詞「仕合せ」に、名詞から形容詞「幸せだ」に用法が変化し、その意味も《巡り合わせ》から《良い巡り合わせ》に変化した語とされる。これについては、実例の検討に基づいた小野(1983,1986)による指摘がある。小野(1986)によれば、「幸せ」は17世紀頃に形容動詞<sup>2</sup>として用いられるようになったことに伴い、その意味に変化が生じたという。本発表では、総合雑誌を資料としたコーパスを用い、近現代において「幸せ」に生じた変化の過程を、「幸福」との関係から考察する。

## 2. 先行研究

『例解新国語辞典 第九版』で「幸せ」と「幸福」の語義を参照すると、「幸せ」は「これ以上のぞむものがなく、十分に満足していられる状態」、「幸福」は「心配なこと、苦しいことがなくて、みちたりた理想的な状態」とある。「十分に」「みちたりた」等の記述から、「幸せ」と「幸福」は、何らかの基準を上回っていると評価する点で共通すると考えられる。これは小野(1986)の記述とも合致する。小野(1986)では、元来「幸せ」は「しあわせがヨイ／ワルイ」のように評価語「ヨイ／ワルイ」を伴っていたが、それらが次第に表示されなくなり、「そちはしあわせじゃ」のように形容動詞として用いられるようになったことで《良い巡り合わせ》という評価を表す意味を、「幸せ」自体が表すようになったとした。

評価を表す形容詞で最も一般的な語である「いい」を対象に、その統語的特徴を整理した山田(2006)は、「このへんでもうイイでしょう」等、「Nはイイ」として用いられる場合、「Nは現状で十分」である点で共通するとした。これは例えば、「話が長いので、私はその話が十分だ(不必要だ)」等の意味と解釈できる。この場合、話し手である「私」は評価をする立場の[評価の主体]として、「その話」は評価をされる立場の[評価の対象]と捉えられる。評価形容詞を分析する上では、これらの[評価の主体]と[評価の対象]に着目することが有効であると考えられる。

なお、形容詞の[評価の対象]は、従来、対象語としてガ格で示されるとされてきた(時枝1941等)。一方、感情形容詞については、[評価の対象]が、文中の様々な位置に示されることが指摘されてきた。本発表では、その中でも、条件句(八亀2008)<sup>3</sup>や、従属節、被修飾語(村上2015)等を[評価の対象]として分析する。

## 3. 調査方法

コーパスから得た用例を品詞によって分類し、品詞別・各期別頻度推移を明らかにする。用例の使用年を5つの期に分け、各期における頻度を観察する。各期の頻度は、100万語あたりの相対頻

<sup>1</sup> 本発表では、形態的な違いによる[形容詞][形容動詞]という区分は用いず、[形容詞]としてまとめる。助詞「の」を後接する場合も形容詞として扱う場合がある。

<sup>2</sup> 小野(1986)では[形容動詞]という用語の是非については述べていないが、これを[名詞+助動詞]と見ることにについては「やや解釈に無理が生ずる」と述べている。

<sup>3</sup> 八亀(2008)では[評価の客体]という用語を用いている。

度を算出する。品詞は、[名詞][形容詞][その他]に分ける。なお、[その他]には、複合語要素、固有名詞、副詞的用法等が含まれる。意味分析は、形容詞に着目して行う。用例を分析する観点を設定し、それによって用例を分類した上で、各期別の頻度推移を見る。

「幸せ」と「幸福」が形容詞として用いられる場合、例えば以下の例(1)から(3)のように[評価の主体](二重線部)と[評価の対象](実線部)が示される。

- (1) 私は何も不安がないことが幸せだ／幸福だ。(作例)
- (2) 親から愛情を受けることは子供にとって幸せだ／幸福だ。(作例)
- (3) 夢を叶えた人は幸せだ。(作例)

先に示した辞書の記述によると、「幸せ」と「幸福」は《評価者が、実現した状況に対して、評価者にとって望ましい状況として評価する》点で共通すると考えられる。このことから、「幸せ」と「幸福」を分析する際には、[評価の主体]は「評価者」を指す〈評価主〉として、[評価の対象]は「実現した状況」を指す〈実現状況〉としてそれぞれ呼ぶことができる。本発表では、これらの〈評価主〉と〈実現状況〉を分析の観点として、形容詞として用いられる「幸せ」と「幸福」の意味変化を考察する。

#### 4. 調査資料

調査資料には、19世紀末から20世紀末までの均質な通時的データを得られるという点から、次の二つのコーパスを用いる。一つは、国立国語研究所で開発された『日本語歴史コーパス 明治・大正編 I 雑誌』の『太陽』と女性雑誌各種『女学雑誌』『女学世界』『婦人倶楽部』(1894-1925年)である。もう一つは、同じく国立国語研究所で構築途中の『昭和・平成書き言葉コーパス』の『中央公論』(1933-1957年)と『文藝春秋』(1965-1997年)である。各コーパスの総語数を表1に示す。

調査対象資料において、キーに[語彙素]「幸せ」もしくは「幸福」を設定して検索すると、「幸せ」は578例、「幸福」は1935例の用例が得られる。「幸せ」の用例を

表 1 各期における調査資料の総語数

コーパス	各期	年代	総語数(記号等除外・全て)
CHJ	CHJ1期	1894年・1895年・1901年	4,594,197
	CHJ2期	1909年・1917年・1925年	6,757,948
SHC	SHC1期	1933年・1941年・1949年	6,842,760
	SHC2期	1957年・1965年・1973年	7,504,667
	SHC3期	1981年・1989年・1997年	7,993,530

確認すると、「仕合」の表記で「試合」を意味する用例が12例あった。これらは誤解析とし対象外とした。また、「幸福」として収集した用例の中に、ルビが「しあわせ(しはわせ)」(39例)、「さいわい(さいはい・さいはひ)」(5例)、「さち」(1例)、「ハピネス」(1例)のものが計46例あった。これらを「幸福」の用例から除外した。このうち「幸せ」(39例)にあたるものは「幸せ」の用例に含めた。その結果、対象とする用例は「幸せ」が605例、「幸福」が1889例となった。

#### 5. 調査結果

##### 5.1 品詞別・各期別頻度推移

右に示す図1で、「幸せ」と「幸福」の各期別の頻度推移を見る。それぞれの数値は、用例の使用年を5つに分けた場合の、各期の100万語あたりの相対頻度である。図1を見ると、「幸福」が、CHJ2期とSHC1期の間と、SHC2期とSHC3期の間で大幅に減少していることが分かる。

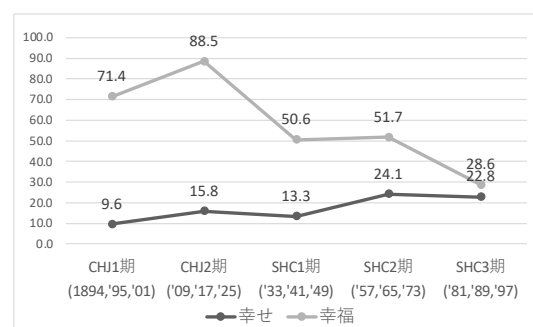


図 1 「幸せ」と「幸福」の各期別頻度推移

一方、「幸せ」の頻度推移(図2)を見ると、CHJ1期とCHJ2期の間、そしてSHC1期からSHC2期の間で大きく増加していることが明らかである。

さらに、各期における「幸せ」と「幸福」の品詞別頻度推移を見る(図3「幸せ」、図4「幸福」)。図3から、「幸せ」は、頻度の増加が見られた時期と同時期に形容詞用法の割合が大きくなることが指摘できる。この傾向は、

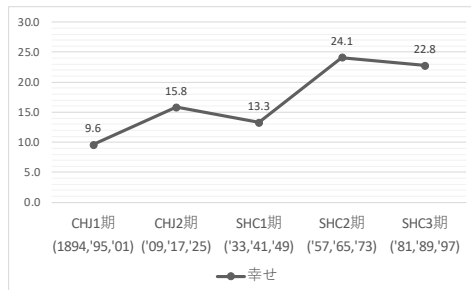


図2 「幸せ」の各期別頻度推移

SHC3期に強くなり、この時期の「幸せ」の用例の約9割が形容詞として用いられていることが分かる。

一方、図4から、「幸福」は、CHJ1期とCHJ2期の間で形容詞用法の頻度が約3倍に増加していることが分かる。その後、「幸福」における形容詞用法の割合は、一見すると増加しているように見える。しかし頻度は減少しており、SHC3期では名詞用法とともに半数以上減少している。なお、SHC3期で[その他]が増加するが、これは銀行の名称を表す用例が繰り返し使われたためである。

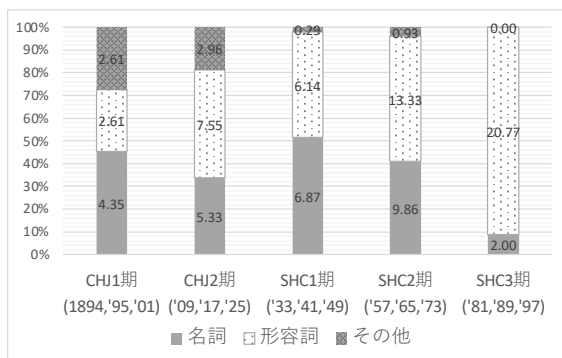


図3 各期における「幸せ」の品詞別使用頻度推移

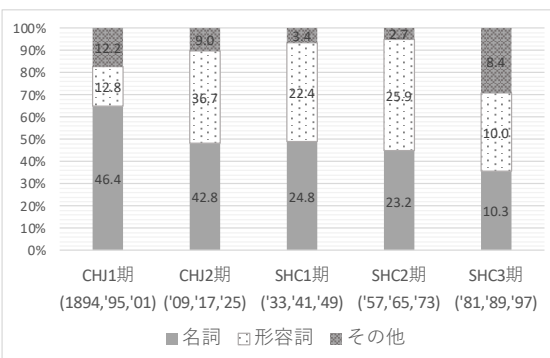


図4 各期における「幸福」の品詞別使用頻度推移

## 5.2 形容詞用法における「幸せ」と「幸福」の意味分析の観点

以上、「幸せ」と「幸福」の変化においては、「幸せ」の頻度の増加、とりわけ形容詞用法の増加が目立っていた。そこで、その変化の事情を考察するために、形容詞用法を取り上げ、「幸せ」と「幸福」の意味を分析していきたい。

「幸せ」と「幸福」の分析の観点として設定した〈評価主〉と〈実現状況〉は、文中の様々な位置に示される。これらが当該の文中に表示されず、前後の文に出現する場合には、それらを分析対象とみなす。以下、〈評価主〉と〈実現状況〉として抜き出した箇所について用例を示す。用例に付した下線については、二重線部が〈評価主〉、実線部が〈実現状況〉を示している。各用例に施されたゴシック体は引用者によるものである。

- (4) 昔も今も平穩無事でしあわせな私には書くことは何もありはしない。(『文藝春秋』1965年3号)
- (5) あなたの周りには豊かな人たちがいる、友だちのおかげであなたは幸福になれる(『文藝春秋』1989年10号)
- (6) 日米親善のために講演會をつづけ得たことは、私にとっては非常に幸福なことであった。(『中央公論』1941年11号)
- (7) 借金がなくなつて、ともかく食べものに不安がないのがしあわせだと、母親が語つた。(『中央公論』1957年12号)

- (8) 一服薬を飲んで置くと、翌日は直つてしまふ。翌日直らないにしても、二三日の内にはすっかり直つてしまふといった調子で、私はとにかく有難いことであり、仕合せなことであると思つて居る。『太陽』1925年12号)
- (9) 彼の父が予等に向ひて、我兒が貴下の家にありし時程、幸福なりし時はあらざるべしと言へる言葉に徴しても明なりと。『太陽』1895年7号)
- (10) お前が尋ねて行つたら、何んなに可愛がつて呉れるだらう、お前は好いお母さんを持つて居て仕合だ『太陽』1895年7号)
- (11) おやじは仕合せな男だったね。好きなように生きてきた明治人だからね。『文藝春秋』1973年1号)
- (12) ふつうは、子供や孫といっしょに暮らせる三世代同居がいちばん幸せで、一人暮らしは孤独で寂しいと思われがちだが、一概にそうとは割り切れないことに気付かされた。『文藝春秋』1981年11号)
- (13) 町でも村でも、みんなが幸福でうれしそうな顔をしている。そのなかの一人として、わたしも幸福である、ということでありたい。『中央公論』1957年10号)

まず、二重線部の〈評価主〉に注目すると、(4)(6)(8)は、いずれも「私」が〈評価主〉であり、これは話し手を指していると考えられる。そのほかの用例では、話し手以外の第三者が〈評価主〉である点で共通している。このことから、〈評価主〉は〈話し手〉〈話し手以外〉に分類できると考えられる。

次に、実線部の〈実現状況〉を見る。(4)は〈評価主〉である「私」の身边が常に安全であることによって、〈評価主〉の「幸せな状況」が実現していることが表されている。(5)では「友だちのおかげで」とあり、〈評価主〉である「あなた」と関わっている「友だち」が、〈評価主〉の「幸福な状況」を実現すると考えられる。これらの〈実現状況〉は、〈評価主〉と関わりを持つ環境や人物である点で共通する。一方、(6)では〈評価主〉である「私」自身が「講演會をつづけ」たことで「幸福な状況」が実現している。以上のことから、〈実現状況〉は、実現する主体が何であるかによって、〈環境〉〈他者〉〈自身〉に分けられそうである。ほかの用例も、(7)(8)は〈環境〉、(9)(10)は〈他者〉、(11)は〈自身〉に分類できる。

なお、文中あるいは前後の文で、これらが表示されない場合は、〈非表示〉とする。(12)は〈評価主〉が〈非表示〉であるもの、(13)は〈実現状況〉が〈非表示〉であるものとした用例である。

以上の点を踏まえ、〈評価主〉を〈話し手〉〈話し手以外〉、〈実現状況〉を〈自身〉〈環境〉〈他者〉に分類する。以下の表2は、〈評価主〉〈実現状況〉の各区分の例のいくつかを示したものである。

表 2 形容詞用法における「幸せ」と「幸福」の〈評価主〉と〈実現状況〉の例

区分		幸せ	幸福
評価主	話し手	私、自分、僕、私達	私、自分、僕、私達、我々、妾、吾人
	話し手以外	あなた、お前、国民、女、人間、男、父母、日本	彼、人、女、夫婦、君、あなた、人々、国民
実現状況	自身	「大なる利益を獲るといふ事になれば」「いつも真剣に生きられると云うの」「このせわしい世のなかに、悠悠と客船で旅をする」「こんなにおいしいものを食べられるなんて」	「大學を出ると、就職の心配はなくて、好きな仕事を選べた、」「一つづつよい作品を生んだといふこと」「蓮華畑で遊んだ時」
	環境	「毎日」「新婚生活」「家庭」「暴風雨吹く日の其外は何に心の驚くことも無き島住みの心安さ」「社会全体が良くなって」	「境遇」「結婚生活」「時代」「雨が降ると」「社会の中流以上に居つて大なる不足さへなければ」「何の患いもない時」
	他者	「彼地で皆様が非常に親切にして下さいましたから」「息子が堅いので」「熱心な先生に恵まれること」「孫にかこまれ」	「生前にも尊敬され、死しても亦尊敬されるのだから」「もし貴方の仰有つたことが本當でしたら」「愛されていて」

### 5.3 形容詞用法における「幸せ」と「幸福」の意味変化

表2に示した分類に基づき、用例を分類し、各期別の頻度推移を見る。まず、〈評価主〉を観点に、その推移を示したものが、以下の図5と図6である。以下の図では、タイトルに示さないが、全て形容詞用法について集計したものである。

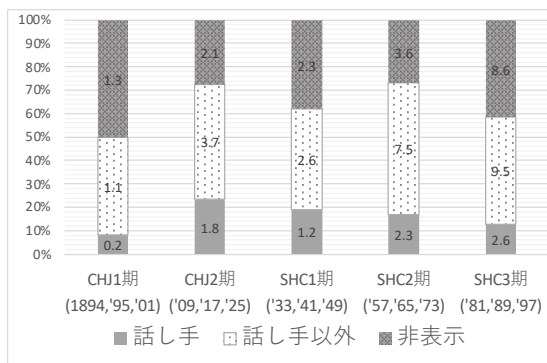


図5「幸せ」の〈評価主〉の各期別頻度推移

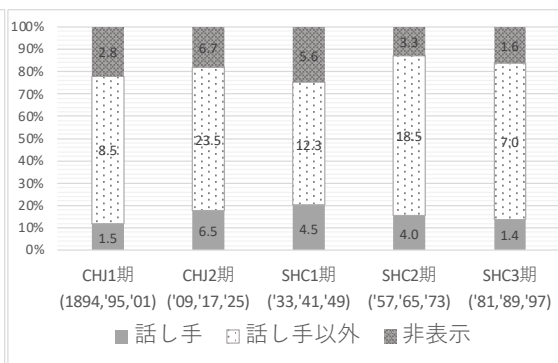


図6「幸福」の〈評価主〉の各期別頻度推移

図5を見ると、「幸せ」はもと〈評価主〉が〈非表示〉の場合が多いことが分かる。CHJ1期では、〈非表示〉が約半数を占めていたが、その後〈話し手以外〉が増加し、SHC2期には〈話し手以外〉が半数以上を占めている。ただし、SHC3期には〈非表示〉も再度増加している。一方、図6を見ると、「幸福」には、〈話し手以外〉の割合がほかより大きいという傾向に変化は見られない。

次に、〈実現状況〉を観点に、それぞれの頻度推移を以下の図7と図8に示す。

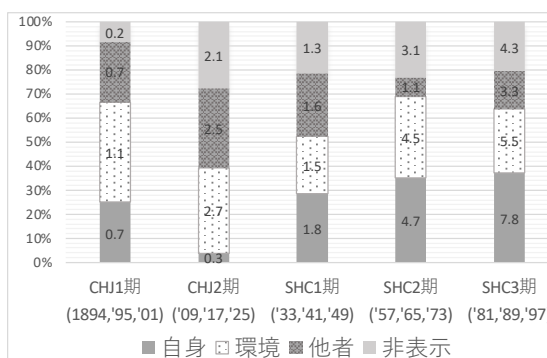


図7「幸せ」の〈実現状況〉の各期別頻度推移

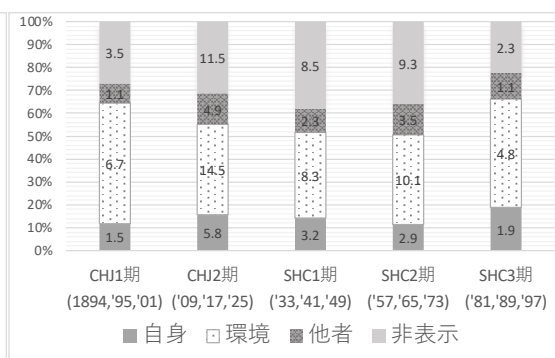


図8「幸福」の〈実現状況〉の各期別頻度推移

図7から、「幸せ」の〈実現状況〉は、CHJ1期、2期では〈環境〉が最も高頻度であることが分かる。CHJ2期では〈他者〉や〈非表示〉の割合も増加しているが、その後は減少傾向にある。SHC1期以降は〈自身〉が増加し、SHC3期では全体の約4割を占めている。一方、図8を見ると、「幸福」はCHJ1期では〈環境〉の割合が大きい、SHC1期では〈非表示〉の割合が大きくなっている。しかし、その後〈非表示〉の割合は減少し、再度〈環境〉の割合が増加する様子が見られる。

## 6. 考察

「幸せ」は、図2に示したように、20世紀初頭と後半に、二度、大きく頻度が増加する時期がある。それと同時に、図3に示したように、この時期は形容詞用法の割合が増加する時期と重なっている。

〈評価主〉においては、この一度目の変化期に〈話し手〉が増え、二度目の変化期には〈話し手以外〉が増えている。一度目の形容詞用法の増加においては、まだ形容詞としての用法が確立され

ておらず、〈話し手〉自身が評価することもあったが、その後、形容詞用法が安定的に用いられるようになるにつれ、〈話し手以外〉の様子を第三者の立場から評価することが多くなったと考えられる。SHC3期における〈非表示〉の増加も、この形容詞用法の増加に関連していると考えられる。

〈実現状況〉では、二度目の変化期の前の、SHC1期から〈自身〉の増加が見られる。このことを〈評価主〉の変化と関連づけると、「幸せ」は、近代には《実現している状況を、望ましいことと評価する》語として様々な用法で用いられていたが、現代は《評価主自身で実現した状況が、評価主にとって望ましい状況だとして、第三者が評価する》形容詞の用法に特化するようになったと考えられる。

こうした「幸せ」の変化は、「幸福」の変化とも連動している。「幸福」は、「幸せ」の一度目の変化期に、「幸福」にも形容詞用法の割合の増加が見られた。これ以降、「幸福」の形容詞用法の頻度は減少に転じるが、「幸せ」が二度目の変化期を迎えるまで、「幸せ」の特徴は「幸福」の特徴との類似性が高まる傾向にあった。これは、「幸せ」の〈評価主〉として〈話し手以外〉が増加したことや、元来〈実現状況〉が〈環境〉であったことによって、そのように解釈できる。しかし、二度目の変化期以降、「幸福」は形容詞用法を大きく減少させるのに対し、「幸せ」は形容詞用法に特化するようになる。それに伴い、「幸せ」と「幸福」は独自の方向性を持って変化していったと言える。

## 7. おわりに

本発表では、近現代に生じた「幸せ」の意味・用法の変化を、「幸福」との相互関係から考察した。発表では検討できなかったが、「幸せ」と「幸福」の変化の様相をより詳細に記述するためには、例えば、文体の変化や名詞から形容詞への品詞用法の変化の過程を検討すること、本発表での〈実現状況〉の文法的特徴をより精緻に整理することが有効であると考えられる。例えば、〈実現状況〉は、従属節で示される場合の節末の形式を整理すると、〈自身〉の表現形式において、「幸せ」と「幸福」、どちらにおいても可能表現が減少することが予測される。

本発表で〈実現状況〉として検討した[評価の対象]については、星川(2021)でも、対象語を観点に「新しい」「新た」「新鮮」の語彙変化の過程を明らかにしている。この[評価の対象]に着目することで、個別の語の変化の観察に留まらず、形容詞語彙全体の変化を統一的に記述することができる。今後も類義語間の関係性の変化について検討を重ね、近現代における形容詞語彙の変化の様相を解明することを課題としたい。

【調査資料】国立国語研究所(2021)『日本語歴史コーパス』(<https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/>)／国立国語研究所『昭和・平成書き言葉コーパス』(科学研究費で構築途上のため、現在非公開。発表者は科学研究費分担者である指導教員の指導の下で使用している)【参考文献】小野正弘(1983)「〈語誌〉しあわせ」『講座日本語の語彙10 語誌Ⅱ』155-160,明治書院／小野正弘(1986)「中立的意味の変化の一解釈—形容動詞化と「ウナギ文」化—」『国文鶴見』21,90-98／時枝誠記(1941)『国語学原論』岩波書店／林四郎・篠崎晃一・相澤正夫・大島資生編『例解新国語辞典 第九版』三省堂／星川睦(2021)「形容詞「新鮮」「新しい」「新た」の語彙変化—近現代雑誌コーパスを資料として—」『国際日本学研究論集』15,21-41／村上佳恵(2015)『現代日本語の感情形容詞の研究』学習院大学大学院人文科学研究科博士論文／八亀裕美(2008)『日本語形容詞の記述的研究—類型論的視点から—』明治書院／山田進(2006)「イイ・ワルイ」『人文書』3,88-109

## 【付記】

本発表は日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究(A)19H00531(代表者:小木曾智信)の成果の一部です。